

2024年に見た映画から 外国映画篇

2024年に封切られた作品の回顧ということで振り返ってみようと思います。今回は外国映画を対象とします。2024年の作品で圧倒的にと言っていい程に記憶に残ったものを挙げると、まずヨルゴス・ランティモス（1973～）の『哀れなるものたち』（2023）と『哀れみの3章』（2024）でしょう。エマ・ストーンとウィレム・デフォーの組合せは、衝撃的な非現実的な世界へと誘ってくれます。一年の内に2本のランティモスの新作を見ることができたのは幸運でした。話題性からすれば、トッド・フィリップス（1970～）『ジョーカー：フォリ・ア・ドウ』（2024）とクリストファー・ノーラン（1970～）『オッペンハイマー』になりますか。いずれも話題性だけでなく鋭い人間観察を基に現代という混沌とした状況を映し出します。クリストファー・ノーランの長篇デヴエウ作『フォロイング』（1999）が、この機会に再映されたことは嬉しい出来事でもありました。

リラ・アビルス（1982～）『夏の終わりに願うこと』（2023）の抒情性、アリ・アスター（1986～）『ボーはおそれている』（2023）は『ミッドサマー』（2019）に続く異常性、31年ぶりの新作を発表したヴィクトル・エリセ（1940～）『瞳を閉じて』（2023）の快挙、アリーチェ・ロールヴァケル（1981～）『墓泥棒と失われた女神』（2023）の土俗性、ジュスティーン・トリエ（1978～）『落下の解剖学』（2023）の意外性に強い映画的メッセージを感じたことを挙げておきましょう。

今やアメリカ映画の劣化を救うのは、一つにはホラー系作品ではないかと思っているのですが（もう一つはタランティーノの復活ですが、もう映画は作らないと言っているらしいのは残念です）、そのトップランナーがアリ・アスターであり、『X』（2022）『パール』（2022）のタイ・ウエスト（1980～）ではないでしょうか。また、『X』『パール』に主演女優ミア・ゴス（1993～）は『パール』のプロデュースと脚本も共同で受け持っている才能豊かな人物であることも付け加えておきます。アリ・アスター的雰囲気十分に感じ取れる、『白いリボン』（2009）『愛、アムール』（2012）と言った名作を世に送った巨匠ミヒャエル・ハネケ（1942～）に師事した経験を持つジェシカ・ハウスナー（1972～）の『クラブゼロ』も2024年の大きな収穫の一つでした。実に怖い作品です。

一方、アジア映画、特に中国映画ではグー・シャオガン（顧曉剛 1988～）『西湖畔に生きる』（2023）、チェン・アール（程耳 1976～）『無名』（2023）、アンソニー・チェン（この人はシンガポールの人ですが、今回は中国で撮影した）『国境ナイトクルージング』（2023）には大いに失望した反面、ワン・ビン（王兵 1967～）『青春』（2023）は、王兵にとってのライフワークである中国の労働問題と中国人労働者の実態を真正面から捉えたドキュメンタリー作品として高く評価できるものです。台湾からはワン・トン（王董 1942～）の作品が公開されたこと、『村と爆弾』（1987）『無言の丘』（1992）は大きな意義のあることでした。 Hou・シャオシェン（侯孝賢）『坊やの人形』（1983）、ロウ・イエ（婁燁）『天安門、恋人たち』（2006）の再映も、またラム・サム（林森）/ レックス・レン（任俠）『少年たちの時代革命』も心に残ります。民主化を求める香港の人たち、特に若い世代の人たちの行く末を考えると同情を禁じ得ません。

中国ではすでに第五世代の映画作家たちの衰えが目立ち、第六世代以降の映画作家の活動に期待を集めたところですが、エンタテインメント性を重視し興行性、コマーシャルズムに走る傾向が懸念されます。2023

年に公開された『宇宙探索編集部』（2023）のコン・ダーシャン（孔大山 1990～）、王兵はもちろん、それに第六世代を代表してジャ・ジャンクー（賈樟柯 1970～）、ディアオ・イーナン（刁亦男 1969～）に期待したいところです。中国映画の上映の際に出てくる国家電影局だかの表示、つまり当局の御墨付き作品であることを示しますが、最近この御墨付き作品の劣化は著しいのではないかと思ってしまう。

筆者が抱き続けるアメリカ映画の劣化への懸念を払拭する訳ではないものの、1940年台から1950年代にかけてのハリウッド映画、それもノワールものを中心に見ていく中で（昔は良かった式の懐古趣味にほかならないかも知れませんが）、マイケル・カーティス（1904～1982）『ミルドレッド・ピアース』（1945）、ロバート・シオドマク（1900～1973）『容疑者』（1950）、ジュールズ・ダッシン（1911～2008）『裸の町』（1948）、ヘンリー・ハサウェイ（1898～1985）『出獄』（1948）、ジョン・ヒューストン（1906～1989）『アスファルト・ジャングル』（1950）、オットー・プレミンジャー（1905～1986）『ローラ殺人事件』（1949）、ヴィンセント・ミネリ（1903～1986）『悪人と美女』（1952）、ロバート・ワイズ（1914～2005）『罨』（1949）は、月並みな表現になりますが、現在でも十分に通じる見応えのある作品であるどころか、映画という総合芸術として捉えた場合の極めて貴重な研究対象となり得るものです。ストーリーの展開、演出の巧さもさることながら、黒白画面での光と影の絶妙なバランスとモノクロならではの表現力は想像を超えるものがあります。

同様にヨーロッパ映画、特にフランス映画の見どころは1930年代の作品にあることを認識しました。ジャン・ルノワール（1894～1979）、ジュリアン・デュヴィヴィエ（1896～1967）といった大巨匠の作品群の素晴らしさを再認識できた年でもありました。また、ポスト・ヌーヴェルヴァーグの旗手として活動したジャン・ユスターシュ（1938～1981）の一連の作品、『わるい仲間』（1963）『サンタクロースの眼は青い』（1966）『ママと娼婦』（1973）『ぼくの小さな恋人たち』（1974）の持つ、政治の時代に向かう中、そして政治の時代の終焉を迎える中での人間の不安心理とやるせなさ、そしてなんとか自己回帰を願う人間の姿を感じてしまいます。いずれも問題作であり意欲作です。ジャン・ユスターシュの悲劇的な死は、ジャン・アケルマン（1950～2015）のこれも悲劇的な死に通じているように見え、その才能の徒花的な喪失感は今後も続いていくことでしょう。